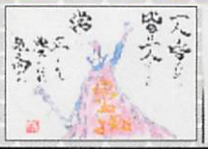
スピリット常中魂



平成２８年　２月８日　NO・１００

〒311-1114　水戸市塩崎町1016
TEL029-269 -2116　　FAX029-269 -3160
Mail　tunezumi-j@magokoro.ed.jp

【ホームページで，カラー版が見られます】

今日は木村さんの日

３年２組では、『今日は○○さんの日』という取組を行っている。

例えば今日は「木村さんの日」だった。クラスの全員が、木村さんの「よいところ」を紙に書き出していく。

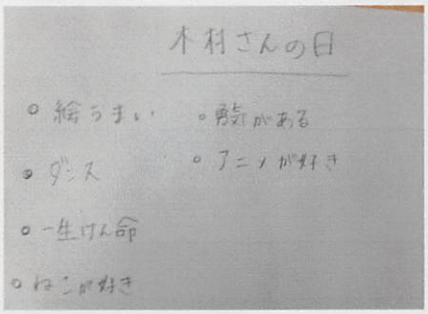
・絵がうまい
・ダンスがうまい
・一生懸命
・勇気がある
・情熱をもっている
・明るい
・字がうまい
・美白
・アニメ好き
・しぐさがかわいい　etc.

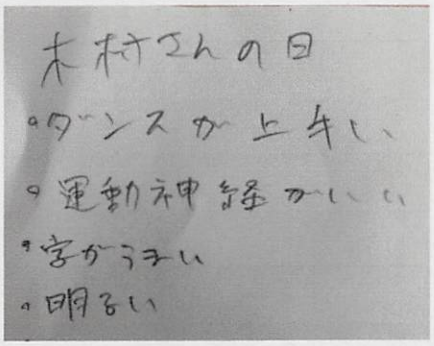
このように、クラス全員が木村さんのよいところを見付け、木村さんに伝えていく。

『子どもは、子ども同士の温かな言葉の中でしか、よりよく育たない』

教育実践化の菊池省三氏はそう述べている。子どもたちには、仲間からの褒め言葉のシャワーが必要だ。

３年２組の、この取組が、常澄中学校の全てのクラスの、全ての生徒の心に届いてほしいと願っている。





『たった一言の力』

ある新聞の社説より

ある新聞の社説に、次のような文章が載っていた。

幼稚園に入園するまでは一日中一緒にいるので母親は子どものことを何でも知っていた。ところが幼稚園に通うようになると、子どもが園でどんなことをしているのか分からない。そのことを母親は「初めてできた秘密」と書いていた。

子どもが園から帰ってくるとカバンを開けることが一番の楽しみになった。園でどんなことをしてきたのか、その「秘密」を少しだけ覗けるからだ。

カバンにはいろんなものが入っていた。まず先生がその日の様子を書いてくれる連絡帳、ポケットに砂が入っている体操服、お絵かきの時間に描いた絵、いろんなものを踏んづけた上靴等々。カバンの中から出てくるものを見ていると、何だか誇らしい気持ちになった。

そしてあっという間に三年の月日が流れ、いよいよ迎えた卒園式。泣くかなあと思っていたが、式は思ったよりも厳粛で、意外と冷静に見ることができた。ところがその日、最後に持って帰ってきたカバンの中身を見て、彼女は涙が溢れて溢れて仕方がなかった。こう書かれてあった。

「短くなったクレヨン、粘土が刷り込まれた粘土板、残りわずかな、のりやテープ。」

どれもこれもぐちゃぐちゃになるまで使い込まれていました。新品だった道具をこんなになるまで使ったんだね。いっぱいいっぱい遊んだんだね。お母さんは嬉しくて、寂しくて、誇らしくて、ポロポロ泣いてしまいました。

子どもの成長を目の当たりにしたとき、嬉しくもあり、寂しくもあり、言葉にならない感情が込み上げてくる。

生まれてから今日までの自分と子どもの「歴史」が走馬灯のように脳裏をかすめるからだろう。

楽しかったことばかりじゃない。思うようにいかない子育てにどれほど悩み、苦しんだことか。

でも苦しかったことばかりじゃない。子どもの愛らしい笑顔にどれほど生きる勇気をもらったことか。そしてもう二度と戻ってくることのないそれらの日々を思うと、切なくなって胸が締め付けられるのだ。

年配の女性が、全く知らない東北の地にお嫁に来て、三人の子どもを育てていた「加代の思い出」を、ある新聞に投稿していた。その記事をたまたま読んだ津田塾大学教授の三砂ちずるさんが著書『タッチハンガー』の中で取り上げている。

買い物帰りの夕方、二人の幼子の手を引き、背中には乳飲み子。母親は土手を、とぼとぼ歩いていた。よほど疲れた顔をしていたのだろう。向こうから来た、作業服姿のおじさんがすれ違い様に声を掛けた。

「母ちゃん、えらいな。だけどもうちょっとの辛抱だよ。もうちょっとがんばれよ。もうすぐ楽になるからな。」

そう言っておじさんは通り過ぎた。若い母親の目から涙が溢れて止まらなかった。

「知らない土地で、知らない人に掛けられたほんの一言に支えられてここまで生きてきた。今の自分があるのは、あのときのおじさんのあの言葉のお陰だ」と綴られていた。

生徒のみなさん、あなたの口から出る言葉には、優しさがあるだろうか。あなたの言葉に支えられている人が、きっといる。